

お知らせ

■TJFの事業を支えてくださっている皆さま

TJFは皆さまからご協力、ご支援をいただき事業を行っております。7～9月に以下の方々から寄附をいただきました。

○7月

佐々木倫子 様

○8月

静永健 様 金在滋 様

○9月

門脇薫 様 牧信之 様

■コラボレーターの活動

新たに3名の方々に〈TJFコラボレーター〉にご登録いただきました。

荻野裕子 様 「中国在住。上海から中国南部での活動の力になります」

堤純子 様 「日本語教育に関心があります。イベントの準備などをお手伝いします」

古谷聡 様 「中国在住。ウェブサイトや出版物の翻訳をします」
7月に、平田絢香様、木内凜太郎様、八野嶺太様に「互いのこと

ばを学ぶ日中高校生のサマーキャンプ」の準備作業を、また、照井はるみ様、馮小喆様には、「好朋友Web」中文版(www.tjf.or.jp/haopengyou/ch/)の中国語のチェックをしていただきました。また、齊藤孝様、永井壽子様には、千葉県内の学校で、「教育代表団派遣事業」の広報をしていただきました。ありがとうございました。

ゆるやかにつながりながら、TJFを応援して下さるコラボレーターを引き続き募集しています。

▶www.tjf.or.jp/jp/collabo.html

TJFの公式Facebookページで日々の活動の様子をお伝えしています。ぜひご覧ください。

▶www.facebook.com/TheJapanForum (藤掛敏也)

サマキャンのしおりの作成に協力してくれた八野さん。



レポート

互いのことばを学ぶ日中高校生のサマーキャンプ 同じ高校生として たくさんのお話を話した10日間

7月23日(月)～8月2日(木)に、中国吉林省長春市で、「互いのことばを学ぶ日中高校生のサマーキャンプ」を開催しました。日本から86名、中国から53名の高校生が参加し、期間中は会場の長春日章学園高校で一緒に寮生活を送りました。このサマーキャンプは、お互いのコミュニケーションに必要な中国語・日本語を学ぶこと、学んだことばやジェスチャーなど自分のコミュニケーションツールを最大限に活用してアイデアや考えを伝えあい、違いを調整して新しい発想や方法を生み出す協同活動を体験することを目的としています。

中国の高校生がつくった日本語の新聞を読む日本の高校生たち。

■伝えあうためのことばを学ぶ

日本語の授業では、中国の高校生が自分たちの住む吉林省や長春市、学校生活を紹介するCMをつくって日本の高校生の前で演



サマキャン☆文化祭。
自分で作った折り紙の
カエルでレースに参加。



じたり、日中の高校生にインタビューして新聞をつくる活動などを行いました。新聞づくりでは、中国の高校生たちが休み時間に日本の高校生の教室に突撃インタビューに出かけ、一日の勉強時間、好きな人の有無、好きな歌、好きな中華料理、長春の印象など、それぞれが興味をもっていることを日本語で少し緊張しながらうれしそうに質問していました。完成した新聞は食堂に貼りだされ、記事を読んだ日本の高校生が感想を書き込みました。

日本の高校生は、中国語の授業で学んだ表現を使ってオリジナル名刺をつくり、互いに自己紹介をしたり、中国の高校生の家庭を訪問するときに使う表現を学んだあと、その場面を想定してグループごとにスキットをつくって演じたり、協同活動で自分の意見を述べるための表現を学んだりしました。中国語を学校で3ヵ月勉強して参加した高校生は、「自分で考えて中国語を使う機会が多かった。習ったことを覚えるだけでなく、実際に使えるようになったことが自信になった」と語っていました。

■ことばを使って伝えあ

日中の高校生の協同活動では、最終日にゲストを迎えて実施する「サマキャン☆文化祭」に向けて、グループに分かれて企画づくりやリハーサルなどを行いました。文化祭づくりは、日常会話ではなく共通の目標達成に向けて意見を交換したり調整したりするために、学んだ中国語や日本語を使います。最初のうちは、言いたいことを相手のことばでどう表現していいかわからず、日本の高校生同士、中国の高校生同士で話してしまい、お互いの考えを伝えあうことができないグループもありました。ある日本の参加者は、「中国の子が言っていることもわからないし、自分たちが言っていることも相手に通じなくて、お互いにもどかしかった。あまりに通じないと、だんだん聞く気もなく

なったりして……。でも、本番は迫ってくる。前に進むために、何とか伝えて、何とかわかりあってという感じだった。どうしても理解してもらえないときは、相手にわかりやすいようにやり方を変えたりした。ゲストは中国の高校生だから中国の人たちのやり方に合わせたほうがいいと思った」と文化祭づくりの過程をふり返ります。

また、企画や進め方についての意見の違いや誤解を早い段階で調整できずに、本番近くになって少し険悪になりながらも真剣な話し合いを行ったグループもいくつかあります。グループ間の企画の調整で意見が対立する場面もありました。グループ代表として話し合いに参加した生徒は、「最初は、それぞれいい意見を言っていると思ったので、お互いがちょっとずつ企画を変えれば解決すると思っていた。でも、ひとりが自分の意見を強く主張して譲らず、話し合いがまったく前に進まなくなった。そのまま押し切ることもできたけど、その子が自分だけ責められてる気持ちになるだろうし、自分たちにもうしろめたさが残る。みんなが楽しく参加できることが大事。そこで、その子に一度自分のグループに帰って話し合ってくるように言った。その間に、残ったメンバーに、その子がもちかえってくる意見をとにかく受け入れて、自分たちが少し企画を変えることで対応しようと提案した。みんなも賛成してくれて話し合いをまとめることができた」と語っていました。本番当日は、サマキャンに参加していない日章学園高校の生徒をゲストに迎え、ダンスをしたり、みんなで一本ずつ花を挿して生け花の作品をつくらったり、紙で作ったカエルでレースをするなど、さまざまな企画を一緒に楽しみました。

サマキャン☆文化祭の企画を話し合う日中の高校生。



■同じ高校生として

帰国後も、仲良くなった中国の高校生とチャットでやりとりを続けている参加者もいます。ある日本の高校生は、「以前は報道で伝えられる中国という国に対していいイメージがなかった。でも、少なくとも今回自分が知り合った中国の高校生はとてもやさしい気持ちをもって。毎日たくさんのことを話した。最近はチャットで尖閣諸島のことをどう思うか聞かれることもある。毎日考えているけど正直答えはわからない。でも、このことで中国の友だちとの関係が変わると思わない」と言います。東京から参加した女子高生は、「同室の子が日本にとっても興味のある人だった。わたしよりよく知っていることがあって驚くこともあったし、日本をもっと知りたいという思いが強くてすごくいい刺激をもらった。同じ高校生としてたくさんのが話せた。そ

ういう友だちができたことがいちばん大きかった」と話してくれました。彼女は、帰国後ご両親に「参加させてくれてありがとうございました。これはちゃんと言わないと、と思って」と伝えたそうです。そのことばを聞いて、ご両親は「体調をくずすなど思うような学校生活を送れないときもあったけれど、このサマーキャンプで大切な経験をたくさんしてきたんだと思い、涙が出た」と話してくれました。(室中直美)

「互いのことばを学ぶ日中高校生のサマーキャンプ」

日本で中国語を学ぶ高校生のためのプログラム(漢語橋)と、中国で日本語を学ぶ高校生のためのプログラム(日本語橋)の合同開催により、本サマーキャンプを実施。

◆漢語橋	主催	中国国家漢弁
	実施	公益財団法人国際文化フォーラム(TJF)
	受け入れ機関	長春日章学園高校
	助成	双日国際交流財団
	協力	文部科学省
	後援	外務省
	特別協力	ANA
◆日本語橋	主催	吉林省教育学院、長春日章学園高校、 公益財団法人国際文化フォーラム(TJF)
	助成	国際交流基金北京日本文化センター、 双日国際交流財団

中国のサマーキャンプ同窓会を開催

6期にわたるOB、OGがつながった

8月11日(土)に「漢語橋：日本の高校生サマーキャンプ 同窓会」を東京で開催しました。2007年から2012年まで過去6回の参加者37名、引率でお世話になった先生4名が参加し、留学先の中国・上海から駆けつけたOBもいました。今回初開催となるこの同窓会

は、OB有志による提案で実現しました。Facebookには「漢語橋日本高校生夏令営・サマキャンOB会」という非公開グループのページが開設され、告知や近況報告に使われています。

「元気〜?」「懐かしい!」久しぶりの再会をよろこぶ声があふれました。参加年度ごとに当時のエピソードや近況を披露してくれました。

「漢語橋と一緒に参加した仲間が中国語を使って自分の夢を実現するため羽ばたいているのを聞くと、私も負けてなんかいられないと、新たな決意が湧きあがってきます」「漢語橋は人生を変えたイベントでした。全国の仲間や、高校時代の自分を厳しく叱ってくれたスタッフの方々がいたおかげで、今の自分がいます。一人でも多くの高校生が漢語橋を通して、中国に興味をもってくれることを願っています」

すでに社会人や大学生となっている人が多く、当時を知る関係者にとって、立派に成長した姿はとても頼もしく、キラキラと輝いています。

TJFは、サマーキャンプOB、OGとのつながりを今後も大切にしていきます。中国語を学ぶ現役高校生たちにとって、先輩たちの活躍する姿が学習の大きな励みとなるとともに、将来の夢をさらに大きく描くことにつながると思います。第2回同窓会でOB、OGと再会するのを楽しみにしています。(藤掛敏也)

高校の韓国語中国語教師研修

「学習のめやす」研修、4年の成果

今年で4回目となる2012年高等学校韓国語中国語教師研修および外国語担当教員セミナーを、初めて大阪、関西大学で8月3日(金)～7日(火)に開催しました。参加者は、関西だけでなく全国、さらには韓国や中国、米国、豪州からも集まり、97名に上りました。前半3日間は、中国語、韓国語だけでなく、英語、スペイン語、ドイツ語、フランス語、日本語に携わる教師が会場に集いました。

■テーマは評価

今回は「学習者の人間的成長を促

懐かしい顔、初めて会う人。
サマーキャンプでつながる。



4回の研修会の全日程に参加した3人に皆勤賞が贈られた。そのひとり、岸先生は「講義で聞いたことをグループで実際にやってみることはしんどかったけれど、頭の理解だけで終わらなかったのはよかったし、刺激し合える仲間ができた。大阪から東京に行くのは、全く苦ではなかった」と研修会をふり返った。

す外国語教育—学習動機と学習効果を高める評価」をテーマに取り上げました。主任講師の當作靖彦氏(カリフォルニア大学サンディエゴ校教授)は、これまでの研修会で「よいテストは、よい学習者をつくる、よいテストは、よい教師をつくる」と繰り返し評価の重要性を強調していました。参加者から研修で取り上げてほしいテーマとして最も多くの方があがったのも評価であり、教育現場からの期待も大きなものがありました。

今年3月にTJFが発表した『外国語学習のめやす2012』では、最初に関心や単元の目標を設定し、次にその目標が達成されたかどうかを測る効果的な評価をつくることを推奨しています。そして、目標と評価をあらかじめ学習者に知らせておきます。これまでは、単元が終わった段階でテストをつくり、評価するケースが多かったのですが、こうすることで、学習者にいい成績をとらせるために、教師は授業内容をどうしたらいいのか、学習者はどうしたらいい成績がとれるのか、より明確になり、学習が効果的に進むようになります。

今回の研修では、ルーブリックを使って評価に取り組んでもらいました。ルーブリックとは、縦軸に評価項目(例:言語機能、文法、語彙、発音、談話のレベル、流暢さなど)を置き、横軸にはその到達レベル(例:目標以上を達成、目標を達成、目標に向かって努力中)を設定した評価基準表です。日本語学習者が書いた作文のサンプルを評価するルーブリックを研修生がペアで作成しました。そのルーブリックで採点した後、隣のペアが作ったルーブリックと交換して別のサンプルを評価し、参加者間でディスカッションを行いました。研修後半の韓国語と中国語教師に分かれて行ったグループワークでも、課題として出された活動を評価するためのルーブリックを作成しました。



アンケートには「2学期からすぐに取り組みたい!」「ぜひ、取り入れものにしたい!」と書きこまれていて、今回取り上げた評価の手法は、教師にとって実践につながるものだったようです。

■4年間の成果

4年にわたる「学習のめやす」研修は、開発過程にあった『学習のめやす2012』の理念から実践にいたる内容を、現場の状況にあわせて改善し、教師とともに検討する場でもありました。「『めやす』の考えに賛成するが、どうやって実践したらいいかわからない」との声を受け、文字・音声、語彙・文法表現の教え方の見直しを提案したり、「決められた教科書があって『めやす』の考え方を取り入れるのは難しい」という現場の状況にあわせて、教科書調理法(テキストブックアダプテーション)を取り上げたりしました。毎回の研修会で得られた声が、『めやす2012』の開発における課題となり冊子にも反映されています。

また、當作氏からは「私たちは、外国語教師である前に、教育者である」という問いかけが何度となく行われました。言語の枠を超えて集まった外国語教師たちにとっては、あらためて外国語教育のあり方を見直すこととなり、『めやす2012』が提案する、学習者の人間的成長を促す外国語教育の考え方が次第に浸透していきました。

その結果、各言語の研究会で「めやす」をテーマとするワークショップが開催されるようになり、研修参加者が中心になって、さまざまな外国語を担当する教師が授業実践について考える、外国語授業実践フォーラム(代表:山下誠氏)が設立されるなど、新しい潮流が生まれています。

■今後の課題

TJFは、「めやす2012」の普及を目的とした研修をこれからも実施していきます。今後は、東京、大阪以外の地域での開催や、1日から2日程度の参加しやすいプログラムを提供するなど、「めやす2012」の提案をより多くの方が共有し、実践に結びつけることをめざしたいと考えています。また、研修参加の動機を高めるための工夫についても検討していきたいと思っています。

(中野敦)

評価の基準表づくりに真剣に取り組む。

インタビューに夢中になり、
気がついたら予定時間をオーバー。



中国大連市で日本語教師研修を実施

インタビューって楽しい!

大連教育学院と共催で、大連市内の中学校日本語教師を対象とする研修会を8月29日(水)～30日(木)に実施しました。新学期が始まる直前の多忙な時期だったにもかかわらず、20名の教師が集まり、研修への関心の高さがうかがえました。TJFは一昨年度から、遼寧省瀋陽市や吉林省長春市でコミュニケーション能力を育む生徒参加型の学習活動を考える研修を実施しています。今回は、教師が生徒役になって、そうした活動を体験してもらいたいと考えて、大連に住む日本人へのインタビューを作品にまとめて発表するプロジェクトワーク「大連に住む日本人と出会おう—その人と大連のつながりを知ろう」を取り入れました。

このプロジェクトワークを通じて、日本語の4技能(読む、書く、話す、聞く)の向上を図るだけでなく、インタビューしたことをわかりやすく効果的に発表する、日本語運用に自信をもつ、グループで協力して活動を進める、プロジェクトワークの手法を自身の授業に活用する可能性を探る、インタビューを通じて大連について新たな発見をすることなどを目標として設定しました。

■日本語力を総動員したインタビュー

1日目の午前は、20名の参加者を6つのグループに分けて、大連に住む日本人6人に取材する準備です。IT企業経営者、日本語学校経営者、雑誌編集者、留学生などさまざまな経歴をもつ6人のプロフィールを読み、グループごとにインタビューしたい人を選びます。どんな質問をすればその人と大連のつながりを知ることができるか、各人が考え、それをグループで共有・分類・整理した後、講師やTJFス

タッフを相手に練習をして、午後の本番に備えます。

各グループの代表が電話で会う場所を確認するところから、午後の活動は始まります。午前中に練習したとおり、手作りの名刺を渡して自己紹介をし、インタビューに応じてくれたことについてお礼を述べて、取材開始です。用意した質問をするだけでなく、相手の答えを聞いてさらに質問を追加したり、話を膨らませたりして、日本語の聞く力、話す力、時にはわからないことばを書いてもらうなどコミュニケーションするための日本語力を総動員したことで、研修生たちは「日本語を使った」と実感できたようです。また、聞きたいことが聞けたか、答えがテーマにつながっているか、もっと聞きたいことがあるか、グループの仲間と確かめ合いながら1時間のインタビューを終えました。研修会場に戻ってきた研修生は、興奮しながら、「楽しかった!」「日本人と初めてこんなに日本語で話した!」「大連に住む日本人のたちの生活や思いを知ることができた」「〇〇さんの人生に感銘を受けた」と感想を述べていました。

その人と大連のつながりをもっとも表すキーワードは何か、その人の何を伝えるべきか、どんな写真を使ってどういうふうにとめるべきか、などをグループごとに活発な意見交換をしながら構成を考えましたが、なかなかまとまらず苦勞していたようです。

■インタビューした方々の人生にふれて

2日目の午前はパワーポイントで作品を仕上げ、午後にはインタビューした方々を招待して発表です。インタビューした人の生き方に自分の人生を重ね合わせたり、同年代の中国人たちの生き方と比較したり、画像や音楽をふんだんに取り入れたり、クイズ形式にしたりと、どの作品も工夫が凝らされていました。取材に協力してくださった日本人の方からも、「自分自身がこんな風に見られているなんておもしろい体験だ」と感想が上がりました。

発表を聞くにあたって、どの点を評価すべきかあらかじめ評価基準表を配り、一人ひとりに、それぞれの作品を評価してもらいました。「何となく」良かった、悪かった、と判断するのではなく、ある基準にもとづいて評価を行うことを研修生に体験してもらうためです。

初めてパワーポイントを使って発表。



■プロジェクトワークで自信を得た

研修会後にプロジェクトワークについてふり返り、ワークシートに記入してもらったところ、「本物の言語環境が体験できてよかった」「グループ活動で協力することの大切さを学んだ」「自分の知識が少ないことがわかっただけでなく、ほかの先生の良いところを学ぶことができた」「評価の仕方を学んだ」という声が多く上がりました。そして、「今回体験したことを生徒にも体験させることができる」と手応えを感じた教師も多くいたようです。

今回の研修のもう一つの大きな成果は、研修生と大連に住む日本人がインタビューを通じてつながったことです。学校現場からは生徒と日本人を交流させたいという要望が頻繁に寄せられており、今回の出会いが、新しいクラス活動につながっていくことを願っています。
(森本雄心)

を学習している中学1、2年生950名全員を対象に『好朋友』を使った二外日本語の授業を実施することに決定しました。いま教師を探しています』『好朋友』を使ってみます。使った感想を知らせます』といったメールが帰国後すぐに次々と届いたのです。

『好朋友』は、学習者に日本語の学びを通じてさまざまな背景をもつ人びととつながる力を身につけてもらうことをめざしています。来年開かれるこの校長連絡会で『好朋友』を使った日本語教育がテーマのひとつに選ばれたことから、『好朋友』がめざす日本語教育が多くの人たちに受け入れられ、今後中国各地に広がる可能性を感じる3日間となりました。
(水口景子)

2012年7月・8月・9月

ほかにこんな活動をしました

中国の日本語教育

『好朋友』が中国全土に広がる兆し

9月6日(木)～8日(土)、中国大連市で「2012年中等日本語教育設置校校長フォーラム・日本語教師検討会」が開かれました。この時期は新学年が始まった直後であると同時に、9月10日の「教師節」の直前でした。中国の学校にとって教師節は全校をあげて教師に感謝の意を表すイベントを行う日で、準備にも時間をかけます。そうした状況にもかかわらず全国11省13校の管理職と日本語教師に加え、大連市内で日本語教育を実施している学校の校長と教師、合わせて約100名が参加しました。

このフォーラムを主催したのは、2011年3月に設立された民間のネットワーク組織「中等日本語教育設置校校長連絡会」で、設立の呼びかけ人は、上海甘泉外国語中学、北京月壇中学、長春第一外国語中学の校長3人です。これら3校は、歴史的にも規模からいっても、中等教育における日本語教育を牽引してきました。この組織に加盟しているのは18校で、管理職や教師間の情報交換を通じて、日本語教育の普及と質的向上を図ることをめざしています。今年は「日本語教育を特色とする学校づくり」をテーマに4校の校長がそれぞれの学校での取り組みを報告しました。

TJFは、大連教育学院と共同で作成した中学校向け日本語教材『好朋友』を使った日本語教育を直接働きかけることができる絶好の機会だと考え、会議に参加するとともに、TJFが『好朋友』や中国の日本語教育事業について発表する機会をもらいました。この成果はすぐに現れました。発表後、何人もの先生が『好朋友』に関心を示してくれただけでなく、「校長と相談して第一外国語として英語

- 第5回「漢語橋」世界中高生中国語コンテスト東日本予選大会（工学院大学孔子学院主催）を後援[7月/東京]
- 第5回「漢語橋」世界中高生中国語コンテスト西日本予選大会（中華人民共和国駐大阪総領事館教育室、立命館孔子学院共催）を後援[7月/京都]
- 高校生のための中国語講座「楽しく学ぼう！ 中国語」をISI国際学院と共催[5～7月、毎週土曜日/東京]
- 『国際文化フォーラム通信』no.95「未来を生きぬく力」を発行[7月]
- 平成24年度高等学校中国語担当教員研修を文部科学省、中国教育部、中国国家漢弁と共催[7～8月/中国長春市]
- 国際韓国語教育学会第22回国際学術大会で「学習のめやす」について発表[8月/韓国ソウル]
- 「協働を生み出すプログラムづくり」事業の一環として、台湾の高雄市立高級工業職業学校の教師と生徒を沖縄県立向陽高校に招聘[8月/沖縄]
- 実践サポートめやすwebに「チャレンジ」コーナーをオープン[8月]
- 「中高校生のための韓国語講座2012」を駐日韓国大使館韓国文化院、同世宗学堂と共催[2012年5月～2013年3月、毎週土曜日/東京]
- 『事業報告2011-2012』（日本語版）を発行[9月]

掲示板

高校生素顔を紹介する写真とエッセー作品募集中!

TJFが海外向け広報に協力している、よみうり写真大賞高校生部門「フォト&エッセーの部」で身近なひとりの高校生の素顔を、5枚までの組写真と200字程度の文章で紹介する作品を募集しています。受賞作品は読売新聞に掲載されるほか、TJFのウェブサイトでも公開します。世界の人たちに自分の作品を見てほしい、大切な友だちを紹介したい、という高校生が身近にいらっしゃる方はぜひこのコンテストを知らせてあげてください。

応募資格……2012年4月現在、日本および海外の高等学校、またはそれに準ずる学校に在学している方

応募作品……ひとりの高校生(自分自身を除く)を主人公とする、2~5枚の写真と文章(200字程度)

締め切り……2012年11月20日(火)

発表……2013年1月中旬

募集要項など詳細は、link.tjf.or.jp/tw2 をご覧ください。

中国語教育取り組み校経験交流会を実施します

中国語教育や中国との交流に取り組む高等学校の校長を中心とする管理職の方々にお集まりいただき、それぞれが抱えている課題を共有したり情報交換したりする「経験交流会」を実施します。奮ってご参加ください。

期日……2012年12月15日(土) 14:00~17:00

場所……TJF会議室(東京都文京区)

対象……中国語・中国理解教育に取り組む高校の責任者(理事長、校長、副校長、教頭)、中国語教育推進地域の教育行政関係者

主催……TJF

参加費……無料

締め切り……11月26日(月)

申込フォームはlink.tjf.or.jp/kc2012 からダウンロードしてください。

ウェブサイト「くりっくにっぼん」が新しくなりました!

TJFだからこそ発信できる「情報」とは何か、私たちが伝えたい「日本」とは何か、について検討を重ね、日本の情報を発信する「くりっくにっぼん」のコーナーをすべて一新して、リニューアルオープンしました。

新生「くりっくにっぼん」では、おもに次の三つのコーナーで、「人」の視点に迫ります。

My Way Your Way……あるテーマを取り上げ、それに関連する人たちへのインタビューを紹介

1/365……日本の高校生や大学生の行事を中心とする日々の過ごし方をレポート

何これ? マジコレ!?……海外から来日した中高生や大学生が発見した「日本」を写真で紹介

これらのコーナーを通じて、さまざまな人に出会い、考えていることや思いを知ることができます。人との出会いこそが、何よりも心を動かし、私たちの思考を刺激し、行動を引き出すのではないのでしょうか。

日本に関心をもってこのウェブサイトを訪れる人たちが、日本に限らず広く異文化や外国語、異なる価値観と出会うことの楽しみを知る、そんな場になればと願っています。ぜひ日本の若い人たちにも読んでほしいと思います。同じ日本に暮らしている私たちにもさまざまな生き方や考え方があること、海外の同年代の人たちから私たちの日常はどう見えているのかなど、多くの気づき生まれることでしよう。

新しくなった「くりっくにっぼん」を多くの場でご活用ください。



www.tjf.or.jp/clicknippon/ja

●「机を移動して3人のグループをつくってください」。授業でグループ学習をしようとしたときのことだそうです。机三つの合わせ方に戸惑ったり、座ったまま動くとしなかつたり……。これは幼稚園でも小学校のことでもなく、ある高校の話です。三つの机を寄せてうまく配置することができず、生徒自身も苦笑していたといいます。ただ座って先生の話聞く授業スタイルに慣れすぎてしまったこと、受験勉強で答えがひとつの世界にどっぷりつかってしまったことが背景にあるのでしょうか、と先生が言ったことが印象的でした。

●「分析力」「思考力」「伝える力」「協働力」「創造力」「ICT活用力」……。今の子どもたちには多くの力が求められています。いずれもさまざまな場面で経験を積み重ね、徐々に身につけていくものです。授業は、教科の内容を学びながらこうした力を身につけるトレーニングには最適の場です。ただし、やみくもに運動すれば身体が鍛えられるわけではないのと同様、トレーニングを効果的なものにするためには、研究や理論に裏づけられた方法に則って授業をデザインすることが必要です。

●アメリカでは、2050年までには伝統的な「教師」という仕事はなくなるとの予測が出ているそうです。「教師」はカリキュラムデザイナーという職業に取って代わられるだろうと、ある先生がおっしゃっていました。

●今回の特集に出てくる、「知識構成型ジグソー法」やシンキング・ツールは、教科の枠を超えて、子

どもの発達段階にあわせて使えるように開発されたものです。子どもたちの興味や関心に沿いながら、こうしたツールを活用して授業をまさにデザインしていくことが必要なのではないでしょうか。そうした学びを繰り返すことで、21世紀に生きる力が子どもに備わってくるのだと思います。

●TJFは今、学びをいかにデザインするかにチャレンジしています。例えば、沖縄、大阪、台湾の学校の先生たちと一しょに協働を生み出すための年間のカリキュラムづくりをしています。ことばも文化背景も異なる三つの高校の生徒が、テレビ会議システムなどを利用してさまざまな課題に取り組むなかで、「コミュニケーション力」「表現力」「創造力」が鍛えられています。また、毎夏実施している「互いのことばを学ぶ日中高校生の交流プログラム」では、日中の高校生が、「サマキャン☆文化祭」を企画、実施していく過程で、伝えたいことがなかなか伝わらないもどかしさを感じながらも、ともに何かを創りだしていく力を身につけられるよう、10日間の活動をデザインしています。

●これからの時代を生きぬく力の育成という目標に向かって研究や実践に取り組んでいる人たちがまだまだたくさんいます。こうした人たちの力を借りながら、ことばと文化の学びと交流の場をデザインしていきたいと思ひます。

水口景子

編集後記

国際文化フォーラム通信96号

2012年10月

発行人……内藤裕之
編集人……水口景子
アートディレクション……鈴木一誌
デザイン+DTPオペレーション……大河原哲
出力・印刷・製本……凸版印刷(株)
校閲・校正……天山舎
表紙写真……大木茂

公益財団法人 国際文化フォーラム

〒112-0013

東京都文京区音羽1-17-14

音羽YKビル3階

Phone: 03-5981-5226

Fax: 03-5981-5227

E-mail: forum@tjf.or.jp

www.tjf.or.jp